

玉城デニー

沖縄県知事



辺野古新基地阻止へ激務が続く。「ギターと家族とビールが頑張りの源かな」(妻・智恵子)

包み込む力で「民主主義の逆襲」を狙う

2018年に亡くなった翁長雄志の弔い合戦で、沖縄県知事選に立候補し、過去最多の票を獲得して当選した。幼少時代は容姿でいじめられた。父はアメリカ人。だが、会ったことはない。働きに出た母に代わる「育ての母」もいる。母子家庭で育ったことは、玉城デニーを強くした。辺野古の新基地建設阻止も、誰一人取り残さない政治もきつと実現させる。

文〓山岡淳一郎 写真〓山城博明

丘の上の沖縄県知事公舎を風が吹き抜ける。

「カラスの赤ちゃん、いなくなつたねえ」

玉城デニー(60)が庭園のガジュマルを見上げた。

「親ガラスが餌を運んでいたけど、巣立つたかな」

妻の智恵子(60)が返す。昨秋、夫妻は沖縄市の

自宅から那覇市寄宮の知事公舎に越してきた。

夫の知事就任は、長年、公立保育所で働いてきた妻にとつても大きな転機だった。「知事の体調を管理できるのはあなただけよ。サポートに専念してね」と支援者には暗に退職を促される。前任

の翁長雄志が志半ばで急逝しただけに周りは体調管理に敏感だ。しかし智恵子は、今年3月の定年

まで職務を全うしたかった。悩んでいるとデニー

があっけらかんと言った。

「ここから通えばいいさあ」

智恵子は、半年間、自分で車を運転し、片道1

時間余りかけて保育所に通い、定年を迎えた。広

大な邸の主になつても夫妻は自然体を保っている。

「料理を作っていると、ギターを抱いた渡り鳥一

つて言いながら、台所に入ってきてクラプトンの

曲とか歌ってますねえ。家族と音楽とビールが、

あの人の頑張るためのアイテム」と智恵子は笑う。

9月中旬のある日、デニーは、つかの間のオフ

を終えて正装のかりゆしウェアに着替えた。これ

から公務で船に乗り、辺野古の新基地建設現場を

海上視察するという。ひと月後の訪米に備えて現場感を養いたいようだ。

首相の安倍晋三はじめ政府要人は「日米同盟の

抑止力、普天間飛行場の危険性除去を考えると辺

野古移設が唯一の解決策」と判で押したようにく

りかえず。だが、狭い島に米軍専用施設面積の70

%超を押しつけられた沖縄の側に立てば不条理だ

らげた。「唯一」の解決策といえながら、辺野古

と他の候補地を比較検討した説明はない。自然の

宝庫、辺野古の地盤は「マヨネーズ並み」の軟弱

さで7万7千本の杭を打ち込まねばならず、沖縄

県の試算では2兆5500億円、少なくとも13年

の工期がかかるという。すべて曖昧なまま国は着

工した。デニーは語る。

「防衛省の公表資料をもとに沖縄県は試算をしま

した。軟弱地盤は水面下90メートルまで続してい

るのに杭の工事実績は70メートルまでしかない。

全国民に対して不透明な公共工事です。2月の辺

野古沿岸部の埋め立ての是非を問う沖縄県民投票

では7割以上の県民が反対の民意を示した。私は

日米同盟の大切さは理解しているし、米軍基地を

全部なくせとは言っていない。ただ、辺野古の新

基地は要らない。政府は工事を止めるべきです」

デニーは右手首に巻くプラスチック製の輪に左手をそとと当てる。輪には「DEMOCRACY

STRIKES BACK」と刻まれている。「民主

主義の逆襲」である。早稲田大学で講演をした

際にプレゼントされたものだ。と、書くこと「闘う

知事」のイメージを抱くかもしれないが、ちよつ

と違う。デニーは政府を批判しつつも一貫して「対

話」を掲げ、扉は開け放ち、全国各地を訪ねて米

軍基地や日米地位協定が「日本国民、みんなの問題」だと訴える。多くの人を包み込むようにして

「民主主義の逆襲」を狙う。

差別された悔しさを

救ったのは育ての母だった

47都道府県を見渡し、過去に遡(さかのぼ)ってもデニーの

ような生い立ちの知事はいない。存在自体が「多

様さ」の象徴であり、時勢が生んだ首長だ。こと

あることに「誰一人取り残さない」とデニーは言う。

取り残された者の苦悩を知っているからだ。う。

玉城デニーは、1959年10月、中頭郡与那城

村西原(現・うるま市)で生まれ、デニスと名づ

けられた。米海兵隊員の父は、伊江島出身の母が

デニーを身籠(みごも)っているときに帰還命令を受けた。

帰国後、母子を呼び寄せようと手紙や写真を送つ

てくるが、母はデニーが2歳になると「アメリカ

には渡らない」と決め、思い出の品々を焼却した。18歳上の女性にデニーを預け、辺野古のAサインバー(米軍公認の飲食店)に賄い婦として住み込む。月に1度、延々と路線バスを乗り継いで与那城に帰ってきては、デニーに添い寝した。

そのころ、本土は高度経済成長の光が溢れ、米軍統治下の沖縄では米兵による農婦射殺やひき逃げ殺人、米軍輸送機墜落……と悲惨な事件が続発した。米軍への怒りが本土復帰運動を高揚させる一方、米兵が落とすドルにしがみつかなければ生きていけない現実があった。ウチナンチュの複雑な情念が日米にルーツを持つ少年に向けられる。

「赤ぶさ(赤髪)」「ヒージャーミー(ヤギの目)」「あいのこ」といじめられた。小学校で半紙に茶碗を伏せて「日の丸」の旗をこしらえた。友人と沿道に並んで復帰運動の行進団に「がんばれっ」と旗を振っていると、通りかかった大人に「君は振らなくていいよ」と言われた。一瞬、意味がわからなかったが、間をおいて差別されたこと知り、全身がカッと熱くなる。「なんで僕がよ。同じウチナンチュだよ」と悔しかった。

打ちのめされた少年を救ったのは、育ての母のまっとうな人間観だった。「トゥーヌイビヤ、ユヌタキヤネーラン(10本の指は同じ長さじゃない。十人十色でいいんだよ)」「カーギーカワドゥヤンドー、カワティーチハガセーラ、ムルユヌムンヤンドー(風貌は皮一枚でしかない。皮をは

がせば、誰も違わないよ)」「とウチナグチで切々とデニーに語りかけた。荒みそうな心に小さな命綱ができる。腕白小僧デニーに明るさが戻った。デニーが小4に上がると母が与那城に帰り、一緒に暮らし始めた。母は、息子の名をデニスから「康裕」に改めて家庭裁判所に届け出る。デニーが父親の消息を訊ねても「もう忘れたよ」と語らなかつた。「ただ一つ教えてくれたのがファーストネームでした」とデニーは振り返る。険の父の手がかりは、ファーストネームだけだった。

水が合わずに職を転々 ラジオDJですぐに人気

思春期に入ってデニーはポピュラー音楽に目覚め、高校でハードロックにどっぷりつかった。先輩のバンドをまねて、デュープ・パープルやブラック・サバスの曲を演奏し、ポーカーを担当するロックの牙城、コザ(現・沖縄市)のホールでシヤウトした。

沖縄のロックシーンは筋金入りである。ベトナム戦争中は、戦場で人を殺した兵隊が大麻を吸ってフラッシュバックし、ステージに突っ込んできた。演奏がつまらないと中身の入ったビール瓶を投げつけられ、灰皿が乱れ飛ぶ。プレッも命がけだ。そこから「紫」や「コンディショニング」

「マリィ・ウィズ・メデューサ」といった名バンドが現れる。デニーは彼らに導かれてステージに上った。ただ、プロを目指そうとは思わなかつた。高校卒業が迫り、母に「アメリカに行きたい」と打ち明けた。育ての母の長女が結婚して米本土に住んでおり、招いてくれていた。しかし、母は首を横に振る。「だったら大学に行かせてよ」と頼むと、母は黙って目を伏せた。経済的に不可能だった。デニーは働きながら通える福祉専門学校を見つけ、東京に出る。とにかく母から離れたかった。いつも明るく陽気なデニー、その内面ではアイデンティティーの葛藤が続いていた。

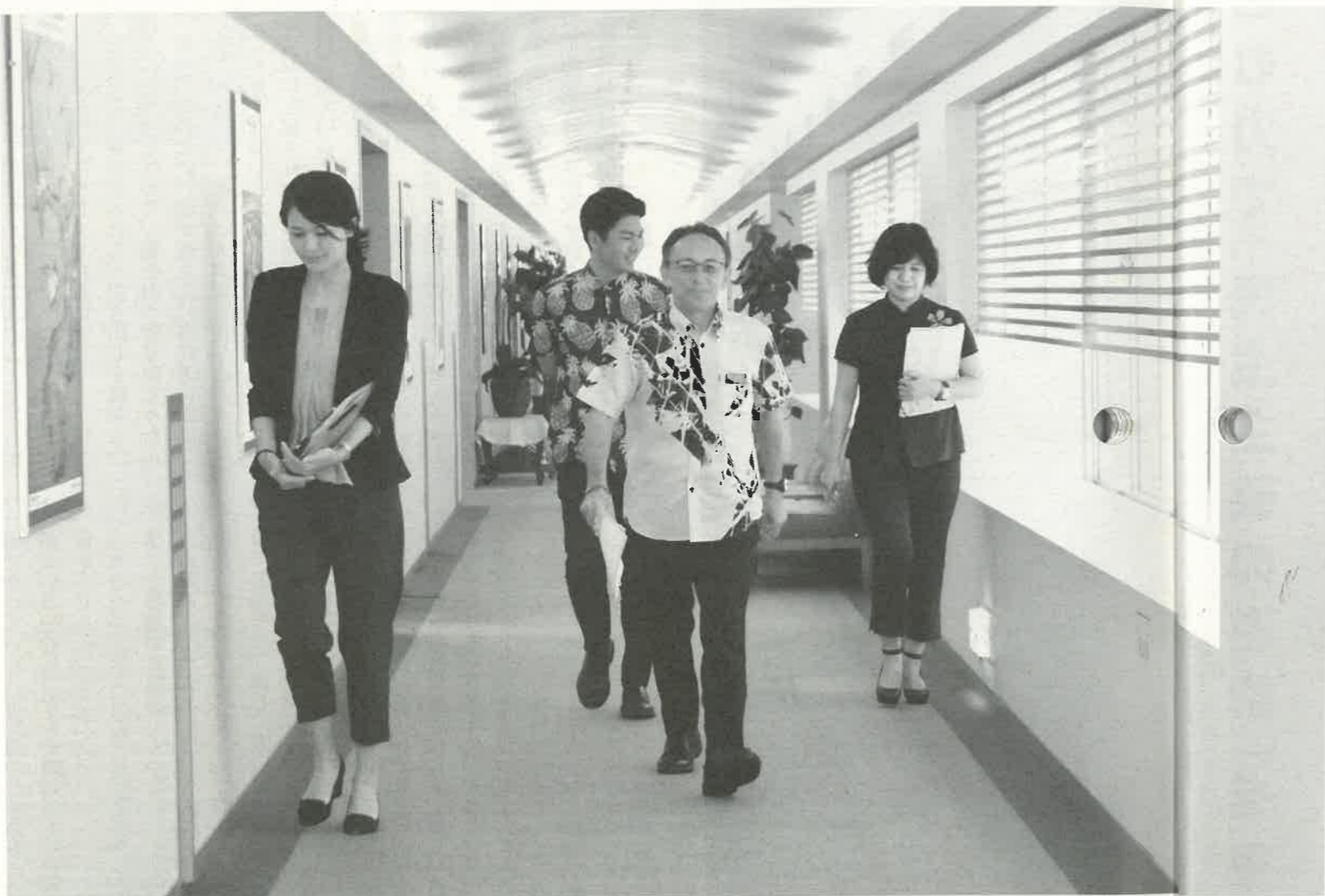
知事となった現在、「子どもの貧困対策」にデニーは並々ならぬ力を注いでいる。
「すべての子どもが、生まれた環境に左右されず、夢と希望をもって育つ。それが健全な社会の基盤でしょう。母子家庭で育った事実が僕を突き動かします。子どもの貧困解消への計画や予算は未来への投資。揺るぎない信念でやっていきたい」

福祉専門学校を出たデニーは、沖縄市の老人センター運営協議会に臨時職員に入った。夜はコザのライブハウスに出演する。そこで観客だった智恵子と知り合い、親の反対を受け流して結婚した。臨時職員の期限を終え、家庭を持ったデニーは、ステージへの未練を断って、インテリア会社に入った。営業でカーテンを売り歩くが、社長と衝突して辞め、内装業に転じる。一人親方で独立したのはいいけれど、不渡り手形を2度もつかまされ、頭を抱え込んだ。真面目に働けば働くほど業界の水が合わず、職を転々。妻は夫を励ました。
「地球46億年の歴史に比べれば、人の一生なんてわずかな点だよ。好きな仕事を思いっきりやればいいさあ。あなたも自分の道を選べばいいよ」
人生の節目にはいつも音楽があった。ライブイ

ベントの打ち上げで司会を任せられ、半ばヤケクソで物まねやウチナグチを駆使して喋りまくった。たまたま見ていた琉球放送の役員が、「おもしろいねえ。ラジオに出てみない」と声をかけてきた。人の縁とは思議なものだ。デニーの声が電波に乗ると、たちまち人気沸騰。白人の顔立ちの青年が、生粋のウチナグチを操り、社会的な話題を当意即妙に語る。生まれ持った多様性、ふたりの母から受け継いだ知性が花開いた。地元の沖縄市や那覇市で結婚式の司会の仕事が次々と舞い込む。家庭では2男2女に恵まれ、水を得た魚のようにタレント活動に奔走した。デニーは天職に就けた、と智恵子は胸をなで下ろす。

沖縄市長選出馬の報道 筋が通らないと出馬せず

だが、運命の糸は奇妙に絡まる。2002年1月、知人が「春の沖縄市長選に出馬しないか」と持ちかけてきた。「いやいや政治や選挙はわからん」と答えると「出るか出ないかは後で決めればいいから、いろんな人に相談したほうがいい」と助言された。家族は反対だった。智恵子は基地撤去が持論で、夜ごと缶ビール片手にデニーと福祉や教育、人権について激論を戦わせるが、それとこれとは別だ。政治の前面に立てば、平穏な生活は守れない。選挙は賭けである。負けたら目も当てられない。働く母親、妻として異を唱えた。デニーは琉球放送の役員に「出馬の誘いがあったけど出る気はありません」と報告する。役員も「急な話だなあ」と笑って終わった、はずだった。
ところが、だ。翌日の新聞に「玉城デニー氏、沖縄市長選出馬」と記事が載った。デニーはびっ



分刻みのスケジュールで動く。多角的なリサーチとファクトに基づいた建策を県庁職員に求める。観光業を中心に沖縄経済は上向きだが、格差と貧困も横たわる。明るくしたたかに県政に挑む